

.....

**おんこちしん**  
**温故知新**という言葉がある。先人に学ぶ。ある資料には、江戸時代は、道中手形や関所など、庶民は容易に旅ができなかったと、考えがちだが実際は、庶民も旅を楽しんだようで「旅行用心集」のような**旅の手引書**や**各地の名所図会**、「東海道中膝栗毛」のような、旅をテーマにした読本等の**版本が流行**。(下図は、大井宿・阿木川の大井橋の欄干にて画像記録)



当時、浮世絵の世界でも、**菱川師宣**の画帖形式の「東海道文間絵図」以降、**喜多川歌麿**、**広重**の師・**歌川豊広**等が手がけ、特に**葛飾北斎**は、七種類の東海道物を描いており、これらはいずれも、**風景よりも、道中の旅人の姿に重点**が置かれている由。そのような中で、**葛飾北斎**の「**富嶽三十六景**」と、**喜多川広重**の「**東海道五十三次之内**」が、名所絵の代表作となっているとのこと。

## ～～山はみどり 野に花 人にはこころ～～

大井宿、宿泊の朝、人目も構わず、早朝から、大井橋の欄干を写真日誌、画像記録したもの。  
おしゃれでなく、最初は恥ずかしかったものの、声をかけていただく人もあり、  
無我夢中になっていたように思う。すべて画像記録。思い出に残る楽しい時間だった。



この恵那の地はかつて東山道の宿駅のひとつとして、古くから交通の要衝であった。江戸時代、江戸と京都を結ぶ主要な街道として、中山道がひらかれた。  
中山道には六十九か所に宿場が設けられ大井の宿は江戸から四十六番目の宿場としてたいそうにぎわった。  
大井橋は当時、阿木川にかかるただひとつの橋で、参勤交代の大名や多くの旅人が渡ったものである。  
その頃の大井橋は木橋だったため阿木川の大水でたびたび流され、大正十二年に永久橋にかけかえられた。  
ところが、昭和五十八年九月二十八日豪雨でこわされた。  
この新しい大井橋は、かつての中山道の歴史をしのぶとともに、新しい文化とまちづくり事業の一環としてつくられたものである。